

Title	学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育(2) : 初等教育における世界地理教育を中心に
Sub Title	The Japanese observations of western education in the mid-nineteenth century : the significance of geography education
Author	太田, 昭子(Ota, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2015
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.136 (2015. 2) ,p.47- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000136-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000136-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 学びの場の風景： 幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育(2) ——初等教育における世界地理教育を中心に——

太田昭子

### 5) 19世紀前半イギリスの地理教科書と“Goldsmith”の功績

#### 5) - 0. はじめに：承前+全体的な問題の所在

「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育(1)」<sup>1)</sup>の議論を踏まえ、本稿では19世紀前半から半ばのイギリスにおける地理教育のあり方を、主として“Goldsmith”<sup>2)</sup>の地理教科書を中心に考察する。地理に限らず、教育において教科書の果たした役割を考える場合、教科書自体の分析、教科書と教育環境・教育方法の関係性、という2つの側面から検討する必要がある。本稿では、“Goldsmith”の地理教科書を中心に、まず教科書の分析という側面からイギリスにおける地理教育の特徴を探りたい。

本稿で“Goldsmith”の地理教科書を中心に据えたのには2つの理由がある。第一に、19世紀前半にイギリスで刊行された地理教科書の中で先駆的な存在であり、アメリカでも19世紀初頭から刊行されていたこと。しかも原著者による改訂版だけでなく、他の編者による改訂版が19世紀後半になっても出版されるなど、長期にわたって影響力を保ち続けたこと。そして第二に、“Goldsmith”の地理教科書は、慶應義塾でも教科書として用いられていたと推察され<sup>3)</sup>、福澤諭吉の地理教育構想に影響を与えた可能性が高いことである。福澤諭吉『世界国尽』(1869)に直接的な影響を及ぼしたミッチェルやコーネルなどによるアメリカの地理教科書については、アルバート・クレイグ著『文明と啓蒙』<sup>4)</sup>などにおいて詳細な分析がなされているが、本稿はそれを補完するものとも位置づけられよう。

## 5) - 1. “Goldsmith” 地理教科書の誕生

既に「学びの場の風景 (1)」第 4 章で述べたとおり、イギリスにおける初等教育の整備は遅く、19 世紀前半に地理は主要教科にはなっていなかった。従って、初等教育レベルの地理教科書が刊行されたのは 19 世紀半ば以降と考えるのが妥当だが、初等教育レベルという条件を外せば、地理教科書の刊行そのものは、地味ながら 19 世紀以前から既に行なわれていたと考えられる<sup>5)</sup>。初期の地理教科書はラテン語からの翻訳本が主流を占め、子供には長くて退屈なものが多かったが、18 世紀後半には、*Geography for Children or A Short and Easy Method of Teaching and Learning Geography Designed Principally for the Use of Schools and England Delineated; or a Geographical Description of Every County in England and Wales* など、子供を対象とした書籍も出回るようになっていた<sup>6)</sup>。その背景には、産業革命の進展と共に、世界地理やイギリス各地の地理や産業などの最新事情を教える必要性の認識が徐々に高まったことが挙げられる。とは言っても、この時代の地理教育は、海外市場拡大を将来担うであろう比較的富裕な層の児童を対象としており、いわゆる労働者層の児童は対象外であった。また、役に立つ知識を手っ取り早く教えることが主眼とされていたため、教科書に子供たちの探究心を喚起したり読んで楽しんだりするための配慮は特になされていなかった。具体的な特徴を挙げると、この時代の地理教科書の多くは、記述式ではなく問答形式の構成をとっており、地図が効果的に使われることもなかったようである<sup>7)</sup>。

19 世紀に入ると海外旅行記などを含む地理書の刊行が増加していった。それらの中で教科書として地理教育に大きな影響を及ぼしたのが、Reverend John Goldsmith による一連の地理教科書である。19 世紀初頭に *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1803), *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1804)<sup>8)</sup>, *Geography on a Popular Plan, Designed for Schools and Young Persons* (1806) などが次々に出版され、またたくまに版を重ねた。例えば、1813 年には *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* の第 45 版が出版されている。当時の出版事情などを考慮に入れると、初版からわずか 10 年程度でここまで版を重ねたことに、その好評ぶりの一端を見て取ることができるだろう。

Goldsmith 地理教科書の影響は、イギリス国内にとどまらずアメリカ東海岸にまで及んだ。1807年には早くもフィラデルフィアで *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* が刊行されている<sup>9)</sup>。アメリカではその後も様々な版が流布し、地理教育の発展に貢献した。もともとアメリカでは地理に限らず教科書が教育の基本的なツールとして重要視されており<sup>10)</sup>、Goldsmithの教科書は有用な雛型の一つと捉えられたのだろう。

Goldsmithの地理教科書はなぜ好評を博し版を重ねたのか。Goldsmithの教科書をもとにした他の編者による改訂本にはどのようなものがあつたのか。教科書の内容検討に入る前に、著者について簡単に紹介しておこう。

#### 5) - 2. Reverend John Goldsmith とは

教科書の著者名である Reverend John Goldsmith はペンネームで、本名ではない。著者の本名は Sir Richard Phillips (1767-1840)。だが、生まれた時の氏名は Philip Richards だったとも言われるなど<sup>11)</sup>、出生地を含め、まだいくつかの謎が残る人物である。

フィリップスは1790年頃から出版業を営むようになり、更に1792年5月に *Leicester Herald* 紙を創刊し、政府批判の論陣を張るなど、活動の幅を広げた。急進主義・共和主義者であつた彼は、1793年にトマス・ペインの *The Rights of Man* (『人間の権利』) を販売したことが煽動罪に当たるとして捕らえられ、18か月間投獄されたが、獄中でも *Leicester Herald* 紙の編集を続けた。出獄した1795年には *The Museum* という隔週発刊の科学系雑誌も創刊したが、同年に起きた火災のため、*Leicester Herald* 共々廃刊に追い込まれた<sup>12)</sup>。だが、フィリップスはこの時に得た保険金を元手に、ロンドンで *The Monthly Magazine* をはじめ複数の雑誌を創刊するなど出版活動を更に拡充した<sup>13)</sup>。*The Monthly Magazine* には、Common Sense の筆名で過激な政府批判記事を載せているが、この筆名は言うまでもなくトマス・ペインの *Common Sense* (1776) を意識してののだろう。19世紀に入るとフィリップスは地理や科学の教科書、安価なマニュアル類、外国語辞書や参考書の類を数多く刊行し成功をおさめた。フランス語、イタリア語、ラテン語の辞書や慣用句集には Abbé Bossuet, そして地理・科学

関係の書籍には Reverend J. Goldsmith の筆名を用いている<sup>14)</sup>。筆名を用いた理由の一つと考えられるのは、数冊の例外を除き、これらの書籍の多くがフィリップスの単著というより、彼の主宰していた雑誌の共同編集者や投稿者、彼のアシスタントたちと共に編纂したものだ<sup>15)</sup>ことである。だが複数のペンネームを用いた理由や詳細な執筆分担、なぜ Reverend J. Goldsmith という筆名にしたのかなどは未詳である。いずれにせよ、これらの出版活動の成功によって彼は経済的な安定を手に入れ、社会的地位も更にステップアップすることとなった。

1807年夏、フィリップスはクリストファー・スミスと共にロンドンのシェリフ（ロンドン市長の前身）に選ばれ、1808年3月に国王ジョージ3世から爵位を授けられた。農夫の家に生まれたとされる彼の出自を考えると、これは破格の栄達だったとも言えるだろう。在任中、彼は債務者の救済に尽力し、債務者拘留所（sponging house）の改善に尽力したが、皮肉なことに彼自身、後年経済的困窮に陥った。それでも周囲の助力を得て *The Monthly Magazine* と発行部数が多い書籍の著作権を買い戻すことに成功し、事業規模の縮小を余儀なくされはしたものの出版業に携わり続けた。1823年に引退した後はブライトンに居を移し、1840年に没した。

まだ明らかではない点があるものの、フィリップスが Reverend John Goldsmith の肩書にあるような聖職者ではなかった<sup>16)</sup>こと、急進主義者として活発な言論活動を行っていたことは間違いない。従って19世紀以降、彼が児童の啓蒙を念頭に置いて教科書・辞典類や啓蒙書の出版を積極的に行なった背景には、急進主義に根ざした教育理念が働いていたと言えるだろう。読み書き計算の基礎学力（いわゆる3Rs）の拡充を主眼としていた当時の教育では、聖書を用いて読み書き能力を磨くことが主流となっていた。だがそれだけでは、世の中を俯瞰する幅広い視野を子供たちに提供するには不十分だとの判断から、フィリップスは地理という傍系の教科の普及に力を注いだと考えられる。

尚、教科書の著者名は基本的に Reverend John Goldsmith となっている<sup>17)</sup>ため、本稿では、Sir Richard Phillips 著と明記されていた場合を除き、原則として著者名を Goldsmith に統一する。

5) - 3. Goldsmith 地理教科書：テキスト分析

5) - 3 - 1. Goldsmith 編の教科書

19 世紀初頭に刊行された、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1803), *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1804), *Geography on a Popular Plan, Designed for Schools and Young Persons* (1806) などゴールドスミスの一連の地理教科書<sup>18)</sup>には、どのような特徴があったのだろうか。18 世紀末までの地理教科書と対比させながら、4 つの側面に絞って考察する。

第一の特徴は、教科書の主要部分の構成が、それまでの問答形式から記述式に変わったことである。例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* の構成は、①太陽系と地球という天文学の視点から地球全体を解説、続いて②ヨーロッパ（イギリスとアイルランドを最後に収録）、アジア（オセアニアを含む）、南北アメリカ、アフリカの順で各国の地理を解説、③世界地理総括と計測、④設問、⑤世界各地の情報リスト（主要都市の緯度経度・地名の発音・短い解説文）となっている（①から⑤の番号は、筆者が便宜的に付けた）。主要な解説部分をなしている①②と③の前半は記述式で記されており、教科書を読み進めていけば、子供たちが世界地理を断片的な知識の集積としてではなく、より包括的に理解できるような配慮がなされていた。その一方で、③の後半と④には、従来の形式にも配慮し、多岐にわたる設問が用意されていた。

また、解説部分の①②と③前半の記述に番号が付されていた点にも注目すべきだろう。これは、同じように記述式の構成をとっていた福澤諭吉『世界国尽』には見られない特徴であった。例えば、前述した *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* の①②には通し番号が振られており、③の解説部分、③後半の設問部分、④の問答形式の設問では、それぞれ 1. から番号が振り直されている。問答形式の部分に番号を振った理由は理解できるが、叙述式の部分にも番号を振ったのはなぜだろうか。番号を振ることにより暗記学習も導入しやすくなるため、問答形式による復習の教育的効率を上げようとしたという側面もあるだろう。また項目ごとに番号を振ってまとめる形式にすることにより、文章がおのずと簡潔になり、教科書にふさわしい文体を目指した側面もあるだろう。19 世紀イギリスの文体には、一文が長くなる傾向があったが、

それは子供の教科書には好ましくはなかった筈である。だがもう一つ、聖書の構成を意識して番号を振ったとも考えられるのではなからうか。聖書の形式は、誰にでも馴染み深いもので、前述したように聖書を読むことは、いわゆる3Rsの柱の一つとなっていた。聖書を想起する形式をとることによって、教育関係者に教科書の長所をアピールしたとも考えられよう<sup>19)</sup>。

第二の特徴は、地図や図版が多用されていたことである。これは旧来の地理教科書と一線を画す、注目すべき特徴だった。*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools, An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools, Geography on a Popular Plan, Designed for Schools and Young Persons*<sup>20)</sup>などには、世界全図や世界各地の地理を示したかなり詳細な地図類など、多数の地図・図版が載せられており、中には折りたたんで収録された大判の地図もあった。地図学習を通して、地球の全体像と細部の両側面への理解を促す配慮がなされていたのである。「地図を掲載すると教科書の印刷費がかさむが、地図に常に言及せず地理を教えようとするほど愚かな行為はない」<sup>21)</sup>とゴールドスミスは序文で述べ、副教材として白地図やワークブックの類も刊行した<sup>22)</sup>。

一方、図版類には主要都市の風景や人々の風俗が描かれており、その地を訪れたら目にする筈の光景を描くことによって、読み手の関心をひきつける工夫がなされていた。序文には「世界の全ての国々の首都の風景とその国の代表的な服装を描いた」<sup>23)</sup>と記されているが、当時鎖国していた日本をはじめ、解説はあるものの図版の掲載されていない国々がある一方で、ヨーロッパ諸国については複数の図版を載せるなど、身近な存在であるヨーロッパ関係の情報に、より多くの紙幅を割いている。

ここで興味深いのが、視覚的効果の高い図版を通して、一種の刷り込みがさりげなく行なわれていたことである。例えば*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools*のローマの項目では、「北緯41度54分に位置するローマは、かつては文明世界の中心だったが、今では急速に衰えている。」と記し、それに呼応するかのよう、「ローマの乞食」というキャプションを付けた図版を掲載した。図版には、襤褸をまとった母子や義足の男性の物乞いなどの姿が描かれている。更にナポリの解説では、「ナポリはコンスタンティノーブルに次

いで美しい都市である。人口は40万人と推定され、その三分の一が路上生活者で、lazzaroni (乞食) と呼ばれている」と記し、「ナポリの浮浪者 (Lazzaroni)」をローマの図版と同じ頁の下段に掲載した<sup>24)</sup>。Lazzaroni (単数形はLazzarone) は、ナポリ社会の最下層に位置する浮浪者・乞食を指していた。しかし18世紀後半から19世紀前半にかけて彼らが反動的な暴動を煽る行動もとったため、マルクスやエンゲルスなどから注目される存在となっていた。ただ、イギリスではその政治的意味合いよりも「悪漢・ごろつき」に相通じる存在として認識されていたようである<sup>25)</sup>。ゴールドスミスの教科書図版における「ナポリの浮浪者」も、暴動などを全く連想させない、自堕落で薄汚れた路上生活者のように描かれていた。人々の風俗を描いた数ある図版の中で、乞食を描いたものは、このローマとナポリの図版頁だけで、読者に強烈な印象を残したことが容易に想像される。このような図版の用い方は、書き手の意図を読者の記憶に留める手法として、長々と「ローマの衰退」「ナポリの貧困」を解説するより、はるかに効果的だったと言えるだろう。図版を通して書き手の意図を読者の記憶に留める手法は、福澤諭吉『世界国尽』でも用いられている。

但し、ゴールドスミスは、偏見に凝り固まった解釈に固執した訳ではなく、状況に応じて評価を変える柔軟性を持っていた。どの教科書も、イタリア・スペイン・ポルトガルなどの南欧諸国に対しては概して辛口な評価が目立つ傾向にはあったが、1808年版 *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* に記された、「ポルトガルは現在ヨーロッパで最も落ちぶれた国の一つで、国民は怠惰と迷信ゆえに堕落している」<sup>26)</sup> という記述は約10年後の教科書では変更され、「フランスによる侵攻を受け、国民は活発に活動するようになった。これは彼らが長らく忘れていた状態である」<sup>27)</sup> あるいは「新しい政治制度は、ポルトガル人の国民性の改善に貢献したようである」<sup>28)</sup> などと評価が好転している。

第三の特徴は、教科書の後半に、三種類の設問群がまとめられていた点である。[1] 最初の設問群は、地球全体に関わる内容（緯度経度、地球規模の気候、天文学など）や計測などに関するもので、ここでは解説項目ごとに地球儀を用いた授業の進め方が丁寧に示され、その総括として「授業での練習例」の設問が挙げられている。[2] 次は地図に基づく設問群で、地図学習を前提にした内

容となっており、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどの地域別に分けられている。[3] 最後は教科書の内容全体を復習するための設問群で、これは順不同、例えば、ロシアの次にベルシヤ、更にラブランド、宇宙、と続くという具合になっていた<sup>29)</sup>。( [1] から [3] の番号は、筆者が便宜的に付けたものである。) ゴールドスミスの地理教科書には、各国の地理情報として、気候風土・人口・面積・緯度経度などの基本情報の他に、政治形態・産業・主要都市の情報なども盛り込まれていた。個々の情報は簡潔なものだったが、数値を含むデータ満載で、記憶すべき情報がぎっしり詰め込まれていたのである。国や都市の短い歴史への言及もあったため、設問には、例えば「420. ロシアはポーランド分割によって何を得たか」<sup>30)</sup>のように、歴史を問うものも含まれていた。設問に対する解答は、*Tutor's Key* という別売の解答集を参照すればわかるようになっており、教師たちは解答集を購入していたようである。

設問は、学習した知識を記憶しているか問うことを主眼としており、地道に教科書の内容を拾っていけば自ずと答えにたどり着けるようになっていた。例えば、「350. アメリカ合衆国は何において名高いか」という問いは、生徒自身の評価や解釈を問うものではなく、アメリカ合衆国について解説した教科書本文 207 の項にある「アメリカ合衆国はすぐれた政治制度において名高い」を解答することを求めたのである<sup>31)</sup>。記述式の構成、豊富な地図や図版など、旧来の教科書にはない要素を盛り込みながら、最終的な設問の発想は知識重視型だったことが、この一例からもうかがわれよう。イギリスで 19 世紀前半から半ばにかけて刊行された教師用マニュアル本も併せると、地理教授法が総じて問答形式を中心に構成されており<sup>32)</sup>、19 世紀半ば以降、改正教育令 (Revised Code) や出来高払い制度 (payment by results) によって、暗記重視の教育が更に加速し、知識重視の傾向が変化することはなかったと考えて良い。ただ、19 世紀前半の早い段階で、地球儀を用いた計測により解答を導き出すことを求めた [1] の設問群、地図の効用を強く意識した [2] の設問群は、注目に値するのではなかろうか。これらは、単なる問答形式から一歩前進した、新しい授業形態を促すものだったと言えるだろう。

第四の注目すべき特徴として、イギリスに関する記述を検討したい。ゴール

ドスミススの初期の地理教科書や改訂版では、イギリスに関する記述はヨーロッパ編の末尾に、総説→イングランド各地→ウェールズ→スコットランド→アイルランドの順でまとめられていた。ヨーロッパの解説を北欧諸国から始め、自国の解説を最後に配置したのは一見すると慎ましやかである。だが、他の諸国に比べイギリスに割いた頁数は多く、ヨーロッパ各国を一巡した後にイギリスの優越性を印象づけようとするような解説がなされていたことなどを考え合わせると、イギリス植民地に関する記述の含まれる、次章のアジアへのつながりの良さを配慮してのことだったとも考えられる。

教科書の版にもよるが、ゴールドスミスが編纂あるいは改訂した版では、図版も含め12頁前後の分量で、記述の大半は各地方・都市などの地誌情報が占めていた。しかし、解説の冒頭にあるイギリス総論の記述は趣を異にするものであった。例えば *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* と *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* などには、手放しに近いイギリス礼讃が綴られている<sup>33)</sup>。イギリスの気候や農産物を紹介した2つ目の項目では、イギリスの或る近代詩人の作品を引用し、イギリスを絶賛した。

“A fairer isle than Britain, never sun  
View'd in his wide career: a lovely spot  
For all that life can ask; salubrious; mild,  
Its hills are green, its woods and prospects fair,  
Its meadows fertile; and, to crown the whole  
In one delightful word, it is our home,  
Our native isle.”

大意：

太陽はイギリスほど美しい島を  
見たことがない。  
それはこの世で最もすばらしい場所だ。  
健康的で穏やかな風土、  
緑なす丘が連なり、森も眺めも美しく、  
肥沃な草地在ら広がっている。  
一言で言い表すならば、

これぞ我々の故国、  
生まれ育った島なのだ。  
(筆者要訳)

雨の多いイギリスの気候風土を考えると、一体これはどこの国だろうと思うような記述である。誰の作品かなどの詳細は未詳だが<sup>34)</sup>、ゴールドスマスはゴドゥンに「429. イギリスは詩人によってどのように描写されているか」という設問まで用意し、生徒たちがこの詩の一節を暗記することを暗に奨励した。イギリスの河川の説明では、ジョン・ミルトンの *At a Vacation Exercise* (1673) からの一節が引用されている<sup>35)</sup>。

イギリス礼讃の記述は次のような調子で続く。「イギリスは文句なしに海上の覇者であり、どの海洋もイギリスの船舶で満ち溢れている。イギリスの富、イギリス製品の精巧さ、通商の繁栄は、他国の追随を許さないほど図抜けている。」「イギリス人の勤勉さと知性、すばらしい政体、代議制と陪審裁判制、島国の独立などは、全世界から賞讃的となっている。」「ロンドン是世界最大にして最も豊かで華やかな、人口も世界最大の都市である。』<sup>36)</sup> 読んでいて気恥ずかしくなるほどの自画自賛だが、解説冒頭で読み手にイギリスの「すばらしさ」を再確認させ、そのすばらしい自国の地誌情報を覚えさせることに教育的効果があると判断したという側面もあったのではなかろうか。

イギリスの項で植民地などへの言及はなかったが、例えばインドの記述には“British India”という項目が含まれており、インドの一部地域におけるイギリス支配が当然のことに扱われていた<sup>37)</sup>。因みに、ゴールドスマスは、1812年に *A Grammar of British Geography: being a general description of the British Empire in Europe, and in all parts of the world* という書籍を上梓している。“British Empire (大英帝国)”という表現が広く用いられるようになったのは、19世紀後半だったが、教科書の標題にこの言葉を用いたのは、この教科書が初めてだったとも言われている<sup>38)</sup>。

以上、4点に絞ってゴールドスマス自身が関わった教科書の特徴を検討した。彼自身は1823年に出版業界から引退したが、彼の教科書が、1868年まで

ほぼ毎年版を重ねたり改訂されたりしたことからも、その人気の高さとイギリス地理教育への高い貢献度は明らかだろう。そこには福澤諭吉『世界国尽』と共通する要素を垣間見することもできる。ただ、彼が教育者ではなく出版者であったことも忘れてはなるまい。彼が地理教科書の出版に着目した背景には、19世紀に入り学校数が増大傾向にあったこと、産業革命の進展と連動してイギリスの海外進出が加速していたことなどが挙げられよう。世界地理の教科書刊行は、出版業界にとって成長が大いに見込める分野であるとの判断から、彼はこの領域に乗り出したのである。販売部数の増進を図っていた彼は、教科書だけでなく、白地図帳や設問に対する解答集や各種の副教材の出版にも熱心だった。実際に、教科書本文の中でも、彼はしばしば、別の教科書や副教材などの書名を挙げて参照することを勧めている。19世紀イギリスにおいて副教材の刊行が盛んだった背景については、教科書と教育環境の関係性に触れる次章で論及する予定である。

### 5) - 3 - 2. 他の編者によるゴールドスミス地理教科書の改訂版

本稿を締めくくる前に、他の編者によるゴールドスミスの地理教科書の改訂版について簡単に触れておこう。既に述べたように、地理教科書は早い段階からアメリカ東海岸でも出版されていた。また、イギリスでも様々な編者が教科書の改訂を手掛けた。改訂の目的も様々で、単なる重版から、内容を大幅に見直したもの、初等教育向けに簡略化したものまで、多岐にわたっている。その全てを取り上げるのはあまりに膨大な作業であるし、議論の焦点がぼやけてしまうことにもなりかねない。そこで、本稿ではアメリカで出版された改訂版のうち2点と、慶應義塾所蔵の、イギリスにおける改訂版2点に絞って、何がどのように変化したのかを中心に考察したい。

アメリカ系の改訂版2点のうちの1点目は、1818年に刊行された *An Easy Grammar of Geography* で、「<sup>いち</sup>フィラデルフィア市民」による改訂版となっている。序文によれば、この改訂版は、初等教育向けにゴールドスミスが改訂したものを更にアメリカ仕様にしたものである。情報量の膨大な教科書原本が低年齢の子供には難しすぎるため、改訂に際しては簡略化が心がけられたが、それ

でも天文学→ヨーロッパから始まる世界各国の地誌→世界地理と計測→設問という流れは変更されていない。解説内容は全体的にスリム化されたものの基本的な構成は保たれている。アメリカでの教育現場に合うように、北アメリカの解説は大幅に増えて 30 頁 (pp.60-89) となり、内容も詳しくなった<sup>39)</sup>ものの、イギリスに関する自画自賛とも言える解説文は、詩の引用部分が削除された程度で、ほぼそのまま残っている<sup>40)</sup>。つまり、この改訂版は、ゴールドスミスによる初等教育向けの改訂をかなり活かし、そこにアメリカの解説部分を足したものと考えて良いだろう。従って、アメリカ仕様の要素を取り除けば、ゴールドスミスが低年齢の子供向けにどのような改訂を行なったかが透けて見える。

その中で、最も注目すべき変更点は、改訂の過程で、地図と図版が 1 点を除き削除されたことだろう。序文で地図を用いた学習の意義への言及があり、地図に基づく設問が取められている点などを考慮すると、教科書に地図・図版を印刷しないことでコスト削減を図り、教室では地図を掲げて授業を行なうことによって地図学習自体は継続させたと推測できる。つまり、教科書が基本的なデータを提供し、それをどのような教材を用いてどのように教えるかは、教育現場の状況や教師の裁量に委ねられたということになる。これは次章で取り上げる、教科書と教育方法の関係性と深く関わる側面だが、子供たちが興味を抱きそうな風俗を描いた図版を削除したのはいささか残念な変更点だった。地図と異なり、風俗画まで用意するほど、当時の教育現場にゆとりはなかったと考えられるからである。

アメリカ系の改訂版のもう 1 点は、Jacob Willetts による *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools upon Goldsmith's Much Approved Plan* (1815) である。書名からもわかるように、これはゴールドスミスの教科書にウィレッツが大幅に手を加えたものだった。この教科書でも地図・図版の頁は削除されたが、授業では別冊にまとめられた 7 枚の地図を用いるように考慮されていた。教科書の構成は、地理と地図の定義に続き、アメリカ合衆国から始まる世界各国の地誌、天体と地球、用語解説となっている。ゴールドスミスの教科書に記載された各国地誌の解説には偏りがあり、ヨーロッパ部分は冗漫で他の地域は情報が

少ないと考えたウイレッツは内容を大幅に見直し<sup>41)</sup>、枝葉と見なされる箇所は容赦なく削除した。各国の「国民性」などに関する記述は少なくなり、詩まで引用したイギリス礼讃は大幅に削られ、僅かに「イギリスの莫大な富、優れた工業製品、盛んな通商、強大な海軍は際立っている」<sup>42)</sup>と記されるにとどまった。アメリカ合衆国の記述は復習問題を含め22頁に及ぶ長いものとなっているが、自国礼讃に陥ることを避け、淡々とした語り口で綴られている。文章は更に簡潔で読みやすくなり、ゴールドスミスの教科書では必ず付されていた項目番号は取り払われ、より記述性の高い形式になった。また、原本に盛り込まれていた、膨大な量の設問群はスリム化され、アメリカ・ヨーロッパ・アジアなどのセクション末に復習問題として掲載される形式に改められた。これは、学習効果を高める改善だったと評価できるだろう。ウイレッツはまた、ゴールドスミスの教科書で深く掘り下げられなかった天文学の解説が拡充されたことに自負を抱いていた<sup>43)</sup>。地理教育において自然科学的な要素の比重が更に高まったのも、看過できない改良点だったと言えるだろう。

上記2点に対し、慶應義塾が所蔵するゴールドスミスの地理教科書2点は、いずれもイギリスで改訂されたものであった。海老名晋が慶應義塾に寄贈した、Edward Hughes 改訂の *A Grammar of General Geography*, (London: Longmans, 刊行年不明)、伴鉄太郎の旧蔵本、*A Grammar of Geography*, (London: William Tegg, 1868) である<sup>44)</sup>。後者の編者は明記されていないが、原著者は1840年に没しているため、第三者が改訂を行なったことだけは間違いない。各国の地誌が北欧ではなくイギリスから始まっている点などを除けば、教科書の構成に大きな変更点はなく、細かな字で情報がびっしり記載されており、情報量が増えているだけでなく、内容もアップデートされている<sup>45)</sup>。原本の形式を踏襲し、各項目に番号を振った構成をとっているが、項目に小見出しが付けられているため、情報量が膨大でも整理され、利用しやすくなっている。情報量の増加に呼応して教科書は分厚くなった（前者は約2cm、後者は約2.5cm）が、縦約10cm、横約16cmと小型化し、読み物として持ち運ぶにも便利なサイズだったと言えるだろう。

どちらの版も地図や図版が多数掲載されているが、精緻な銅版画で、初期の

教科書に掲載された風俗画と比較すると、その質は格段に向上している。これらの充実した内容を考慮すると、これらが海老名や伴の私蔵本ではなく、慶應義塾で「地理書並雑書素読」担当だった海老名晋が、慶應義塾の教科書として用いたと充分考えられるだろう。これらは、児童向きに簡略化された改訂版とは趣を全く異にしており、初等教育を受ける子供たちには明らかに高度過ぎる印象を受けるが、*A Grammar of Geography*, (London: William Tegg, 1868) の序文には、この版が初等教育のニーズに合わせたものだと記されている。これをどのように解釈したら良いのか。初等教育の現場における教科書の役割、つまり教科書と教育方法の関係性に何らかの変化があったのだろうか。また、海外で拡大していたイギリス領に関する教科書の記述にはどのような変化が見出されるのかにも注目する必要がある。これらの検討課題は、『世界国尽』など日本の事例と比較しながら、次章で取り上げることにはしたい。

## 注

- 1) 太田昭子「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（1）」（『教養論叢』第135号，2014年3月），43-69頁。
- 2) “Goldsmith”と敢えて引用符を付けている理由については本稿で後述する。
- 3) 慶應義塾で「地理書並雑書素読」担当だった海老名晋はゴールドスミスの教科書を所有しており、慶應義塾の授業で使用していたと推察される。
- 4) アルバート・クレイグ『文明と啓蒙』（慶應義塾大学出版会，2009年），第2章。源昌久『近代日本における地理学の一潮流』（学文社，2003年）。
- 5) SITWELL, O.F.G., *Four Centuries of Special Geography*, (Vancouver: UBC Press, 1993)の巻末年表を見ると、15世紀後半には地理書が刊行されていた様子がうかがわれる。しかし、地理教科書の刊行は17世紀半ば頃からと考えられている。GRAVES, Norman, *School Textbook Research: The Case of Geography 1800-2000*, (London: Institute of Education, 2001), p.9.
- 6) GRAVES, Norman, *School Textbook Research*, pp.9-11. *Geography for Children*に関して、GravesはJohnsonによる第14版（1783年）に依拠している。発行部数などの詳細は不明だが、刊行された教科書の種類も発行部数も多くはなかったようである。
- 7) GRAVES, Norman, *School Textbook Research*, p.11.
- 8) GRAVESは*An Easy Grammar of Geography*初版の刊行年を1803年としている（*School Textbook Research*, p.16）が、SITWELLは1804年としている（*Four Centuries of*

- Special Geography*, p.626)。
- 9) *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools*, (Philadelphia: Plowman for J. Johnson, 1807).
  - 10) MARSDEN, William E., *The School Textbook Geography, History and Social Studies*, (London: Routledge, 2010), p.13.
  - 11) *Oxford Dictionary of National Biography*, (Oxford: Oxford University Press, 2004).
  - 12) ENGLAND, Steve, *Magnificent Mercury: history of a regional newspaper: the first 125 years of Leicester Mercury*, (Leicester: Kairos, 1999), pp.8-9. *Leicester Herald* は短命に終わったが、後の *Leicester Mercury* の前身となったとされている。
  - 13) 1796年7月1日から *Monthly Magazine* を、翌年には *Antiquary's Magazine* を同志と共同で立ち上げた。
  - 14) *Oxford Dictionary of National Biography*.
  - 15) *Oxford Dictionary of National Biography* は共同執筆者として、*Monthly Magazine* の編集者だった John Aikin、同誌に投稿していた Dr. Mavor などの名前を挙げている。
  - 16) K. ヨコタ氏によれば、*General View of the Manners, Customs and Curiosities of Nations* (1825) の標題紙には、著者 Reverend John Goldsmith の肩書として「ダニントン教区牧師、元ケンブリッジ・トリニティー・コレッジ牧師」と記されているというが、筆者は未見である。YOKOTA, K.A., *Unbecoming British*, (New York: Oxford University Press, 2011), p.251.
  - 17) 版によっては、Sir Richard Phillips の名を記したものもあり、どのような基準で著者名が使い分けられていたかは判然としない。
  - 18) 筆者が閲覧できたのは、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1818年版以降)、*An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1808年版以降)、*Geography on a Popular Plan, Designed for Schools and Young Persons* (1806年版以降)で、必ずしも初版本ではない。ただ、ゴールドスミスによる改訂版である限り、他の編者が改訂した教科書とは異なり、初版の延長線上に位置づけることができると判断した。
  - 19) Graves も「聖書のような様式」に注目している (*School Textbook Research*, p.16)が、その理由については触れていない。筆者の解釈も推測の域を出ておらず、今後検証する必要がある。
  - 20) ゴールドスミスによる改訂版には、いずれも地図や図版がふんだんに載せられている。
  - 21) *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1818, 1821), Preface。筆者は未見だが、*An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1806)にも同様の記述が見られるようである (GRAVES, *School Textbook Research*, pp.16-17)。
  - 22) *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1818, 1821), Preface.

- 23) *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1818, 1821), Preface.
- 24) *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1818, 1821), pp.30-31.
- 25) JESSOP, B. and WHEATLEY, R. eds., *Karl Marx's Social and Political Thoughts*, (London: Routledge, 1999), vol. 6, pp.342-345.
- 26) *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1808), p.25.
- 27) *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1818), p.33. 但し、この改訂を行なったのはゴールドスミスではない可能性がある。
- 28) *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), p.32.
- 29) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), pp.102-154.
- 30) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), p.142. この設問は他の教科書にも記載されている。尚、420. は設問番号を表す。
- 31) この設問も複数の教科書に掲載されている。*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821) では、問いが p.139, 解答となる解説は p.67。
- 32) BREWER, E.C., *My First Book of Geography*, (London: Cassell, 1864); HOOKE, J.J., *Hooke's Easy Questions and Answers on the Maps, for the Lower Forms*, (London: T.J. Allman, 1867) など。
- 33) *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools* (1808), p.25; *A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), pp.33-34.
- 34) Graves は詩の出来栄えを勘案し、これはゴールドスミス作ではないかと推測している (*School Textbook Research*, p.19)。また、*The Christian's Penny Magazine*, (London: Charles Wood and Son, 1832.6.30.), no. 4, p.27 にもこの詩の引用が見られる。記述の中にゴールドスミスの教科書と似た部分があり、この教科書に依拠したとも考えられる。
- 35) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), p.38.
- 36) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), pp.34-35.
- 37) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821), pp.55-58.
- 38) GRAVES, Norman, *School Textbook Research*, p.23.
- 39) 例えば、*A Grammar of General Geography, for the Use of Schools* (1821) では北アメリカの記述は僅か 4 頁に過ぎない。
- 40) *An Easy Grammar of Geography Intended as a Companion and Introduction to the "Geography on a Popular Plan, for Schools, and Young Persons"* (1818), p.34. イギリス国内の詳細な地誌は削除されている。
- 41) WILLETTS, Jacob, *An Easy Grammar of Geography, for the Use of Schools upon Goldsmith's Much Approved Plan*, (Poughkeepsie: P. Potter, 1815), Preface.
- 42) WILLETTS, Jacob, *An Easy Grammar of Geography* (1815), p. 67.

- 43) WILLETTS, Jacob, *An Easy Grammar of Geography* (1815), Preface.
- 44) 福澤諭吉所蔵本とわかっている洋書リストにイギリス系地理書は一冊もないが、「福澤諭吉の将来本」『慶応義塾所蔵幕末伝来蘭・英書展示会 目録と解説』（慶応義塾図書館, 1966年）, 10頁に、海老名晋と伴鉄太郎の旧蔵本として Goldsmith 地理教科書が記されている。
- 45) *A Grammar of Geography*, (London: William Tegg, 1868)の序文には、1867年末分まで情報をアップデートし、加筆訂正したと記されている。